# 人間到る処青山有り

豊田通商シニアエグゼクティブアドバイザー
経団連サブサハラ地域委員長
加留部 淳

若い時の経験によって、その後の人生が左右されることもある。

幼い頃ぜんそく気味だった私は、神奈川県茅ヶ崎市に引っ越した後、ピタリとぜんそくが止まり、家族を安心させたらしい。この引っ越しが遠因となって父は勤め先を辞め、小さな会社を立ち上げた。当時の茅ヶ崎は自然が多く、田んぼでザリガニやカエルを捕まえたりと、楽しい思い出が多い。

中学校ではバスケットボールにのめり込んだ。部活は朝練習などもあり、帰宅後はクタクタでほとんど勉強をしなかったが、幸運にも県立湘南高等学校に進学できた。高校には遠方から2時間かけて通学する者もあり、同級生は秀才ばかりで、ギリギリの成績で入学した私は、その優秀さに驚くばかりだった。私は高校でもバスケ部に打ち込み、半世紀過ぎた今でも親交のあるその頃の仲間は、私の大切な財産だ。

入学式後のホームルームで、担任の先生が「人間到る処青山有り」とおっしゃった。「これからの高校生活、皆で楽しく勉強していこう」という前向きな話の中の言葉だったこともあり、印象に残る話し方とあわせて、今でもよく覚えている。浅学非才の私は「人生はどこでも楽しいことばかりだ」という意味と勘違いして、妙に勇気づけられたのだが、青山とは楽しいところではなく「骨を埋める場所」との意味であり、「墓所はどこにでもある。人間は大志を抱き、故郷にこだわらず広い世界に出て活動すべきである」というのが適切な解釈であると知るのは、かなり後になる。

高校生活は楽しかったが、3年生の夏のバスケ大会を終えてから大学の受験勉強に取りかかり、自分の学力と向きあったところで、現実の厳しさを知ることとなる。志望校を決め入試対策に入った秋に、父の経営していた小さな会社が火事を出し経営が傾いた。火事の後片付けをしながら漠然とした不安に駆られた時、突然「人間到る処青山有り」が頭に浮かんだ。第1志望は実力不足で落ちたが、第2志望の横浜国立大学に何とか現役合格でき、大学卒業後は豊田通商に入社。広い世界で活動し、社長就任後もいろいろな問題・課題に直面することはあったが、その都度この言葉が自然と頭に浮かんできた。ピンチや大きな投資の決断をする時には、冷徹なロジックが一番大切だが、その先のロマンや夢を忘れてはいけないと思う。私の経営信条を支える原点の一つは、私が誤解した、入学式後の担任の先生からの元気な一言だ。